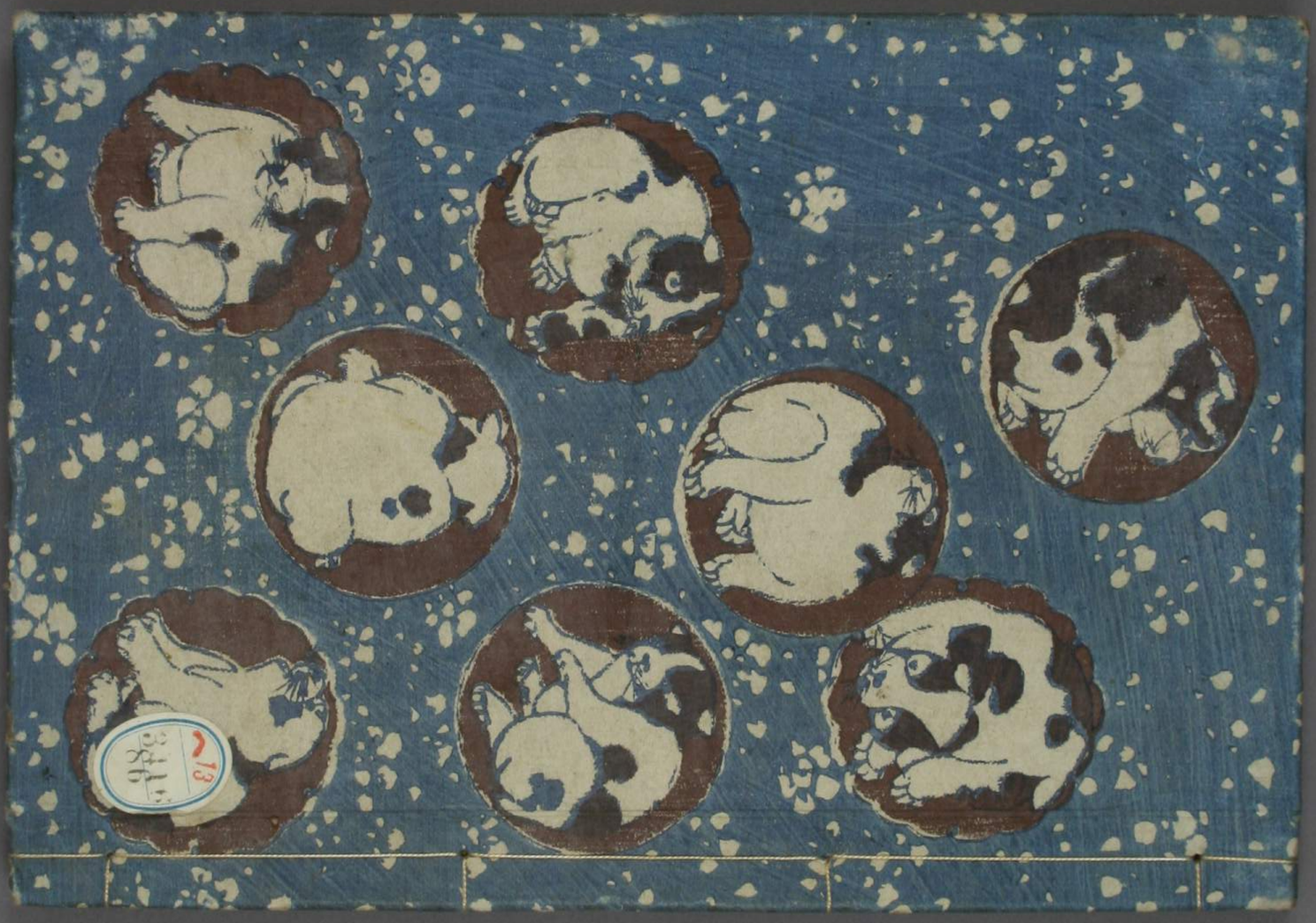

13
3416
85

拾五編卷之廿五

二十五下

杉亜
勝義院

第百六十回　重時異同両姓を逢ふ　義任墨人三勇を先ふ

這時下總の行德口ふ敵を待つ犬川荘介犬田小文五吾八登桐山八満呂復五郎等と俱ふ七八千の兵を引てい[illegible]て其地ふ赴く程ふ上總下總の路次ふ亡の隊ふ加り附く郷士豪民の子弟の壮勇あり名を好む者一千二三百名ありて既ふて荘介小文五吾ハ行德ふ到る時這加勢の士卒ハ皆両股原木の間ふ住めり。のく下總の千葉孝胤の壁と市原の郷士舘持保枝朝經夷濱の郷士大樟村主俊故等則当隊の頭人ら原木両股の間より行德へ一里ふ過ぎ然ば犬牙接る処のく相救ふ便り宜敷椅角の勢ひを張るふ足れり。恁て後安らけ荘介と小文五吾等ハそゞ儘ふ人馬を找めてあの日行德へ來れども敢民業を妨げず。又民屋を焼拂ひ地の理ふ据く塩濱ふ陣まるふ南ハ左の

方に當りて茫渺たる大洋を前面に則西に當りて端に一箇の大河あり上を則利根河也又是を暴河とも阪東太郎即是なり其中流を分て斫と云真間國府臺にあの邊に在り其次に市河也下流を今井と呼ひ故に是より南の方海に朝る早瀬の中に一箇の小嶋あり妙見嶋と叫ぶ若是なり河畔に下今井村あり河より西に上今井村あり因て河の字に負て其本名暴河也是より西東に小松中川女木逆井猿江村五本松南本所北本所両國河より西を武藏と云へ葛飾郡也その邊処々に小流あり村落も亦ヨヌより枚擧るに遑あらず南に則深川也蓋行德より下て両國河也今の路と同じくねど約莫四五里許一里五町文五吾に問でもあり故郷に行る行德より去向も都て熟路なれども猶も間諜を遣して敵の虚実を探らるに這地の寄隊に仮令妙見嶋

と今井河の岸に柵を作り守屋を構へ高く水楼を抗て隊より守を成る敵の士卒二三千名あり河原なる柵の頭人に扇谷の兵頭小越小權太表練千葉自胤の兵頭獲嶋郡司将衡是と又妙見嶋の頭人に大石憲重の老黨彦別夜又五吾數世五百個の兵を從へて水中に千仞なる鎖鎌子を張亘して敵の馬脚を奪ん欲し又水涯に時尚世に平なる大砲を多く並備へて敵河を渉さんとす前岸に立聚て鼓を拂ん鬨を構へ准備凡庸ならざるを間諜見の告るに拠て知る冷笑して小文五吾に向て這大河の前面なる敵の柵に逆て封疆を成る與に今初めなる事なれど今に寄隊の先鋒なる不反て戍を固くして破られじとの意欲なる主客の准備表裏也其勇なるを知るに足れりとの小文五吾點頭て然て他ならず地を易て只其戍を固くしてその為なるべし

去りとも我们へ則是防禦使ゆゑ。找く人の國郡を奪んとて來ぬるあら
ば。今若謀計をめぐ。那両柵を捕れとるべ。難くもあらぬ拔ぎ。先只館の
御上旨を守りて寄隊の大軍を待て一度ふ破らんとふ莊仗素よりまの意あ
ば。隨即濱邊ふ柵を構へ。且塩濱と今井の上流ふヨリ快船を維ぐのも
爰ふ長陣の准備して寄隊の向ふを俟ば。十一月ハ果敢く盡て十二月の
初ふ至りぬれば。有怎一程ふ満呂復五郎重時ハ這陣中ふ做エもるに徒然ふ
堪ざりければ。有一日獨立出て漫ろ行程ふ彷徳の左右ふ
川添の村落ヨリ。所謂堀江猫買鈇真間関嶋新井湊村河原大
和田稲荷木之市河ふ至れば。街衢同じ様ぞ。その餘も猶あらんを要るけ
備るゆゑ。間話休題。その日復五郎重時ハ東西とうち巡る。隨ふ憶ぞ湊
村ふ來ける。折ふ夏々丁々と。燒刀の稜打鳴ぞ。鎚の音耳ふ响く高か

ふ。ぞ。それば。這村の坎稍盡処ふ最寒く。錺匠ぞ家あり。主人とおぼ一
個の漢子年齢ハ五十有餘ぞ。其子ぞ。あらん年十六七ぞ。一個の猴子
と。相共ふ鍛を鍛冶ひく。見く器械を製出ぞ。有ける。重時ぞ今這里ふ
來て。憶ぞ其店前ふ歩を駐ゆく。簾ふ樹夾みぞ。出刀と刀子を見るふ皆
是藤原信之と。勒ぞ。四字の銘あり。又其側の壁ふ白土ー七。大ぞ竹輪の
内ふ屋字を寫ぞ。ハ九屋ぞ。と。猜せぞ。且其猴子の逞ーげぞ。全身黑
く膏満ぞ。眼圓ふ骨太く。身ふ梼の敗て下短ぞ。夾衣只單被ぞ。
敢寒けく面色せぞ。賸祖ぞ。両袖を腹ふ卷て。裳を股ふ引折結
ぞ。合鎚を打ふ為体。都て槍棒の法ふ稱ひて。膂力あるべく見えぞ。
重時ハ立ぞ。沼去ぞ。其冶ひ果ぞ。急ふ主人を喚て。ぞ。其里
ぞ。漢子汝が作りー新刀ハ。ぞ。我買ぞ。欲ぞ。出ーて見せよ。其麿ぞ

やと問れて主人は見久りて。官人先框へ尻を撰き是。先代まで刀鍛冶也。
新刀も多くは小可は其弟子也。太刀は吸るのみ。老化て鈍る故本性
故に技はと極く少へば出及刀子を作るのみとの不を重時うち守て開は左まれ右も
あれ。あの家鞴は丸屋ふ。ちくしは竹輪は安房の満呂の花鞴。我は昔年亡
びし。麻呂小五郎信時の親族る。満呂復五郎重時是也今は里見殿ふ
仕まつる。昨今塩濱の陣ふ在り。若是洲ゞ東人の先祖は満呂氏ふあらざ
る歟。刻や又這少年の骨相を見て猜まるふ武藝を嗜る者ふ似る。年は
幾箇。名を何とふ。久後憑し。心地でまる由緒のあるむ守まく欲し。と云
ふ。木瓜は頭を掻て原来御身は満呂氏也。濱の御陣より来ませ。欲問
ま。まつりく。恥。況小可ゞ故東人も則是満呂氏也。在昔鎌倉の將軍家
創業の時頼朝公ふ従ふまつり。麻呂五郎信俊殿とやらの庶流ふ。

子孫氏間ふ降ぐらう。鍛匠。その生活。口碑ふ伝へのみ。詳ふ知ぬ
以ども。既ふ猜しふぐ。今もあれ。満呂氏也。信之は家の通稱。然ば這子は小
可ゞ主ふ肖也。故東人。丸屋太郎平の獨子。これが再太郎と喚。倣しふ二
親早く身故りしば。小可年來後見して。今茲ふ十八歳ふ。然ば這
子の生年は文正元年丙戌也。且丁の月日ふ生れし所以。欲甚しふ熱性る
ふ生活さへ火を宗とする。鍛冶の子でゆへ性とて水を好ぬ。冬も渙
細して。村後る昆來河へ身を漫ぬ。ありても反て快しとふ。ぬ。誰
教ねども。水戯ふ自由を沼れば。夏はいふく早瀬を敷ぐ。泅ぐて西の岸ふ届
る。小可叱り林ふれども。兎毛だるも。聞ざるける。嗜好は又只是のみ。角觝
白打。槍棒。撃剣。悄々地ふ其師ふ就て。学ぶのみ。田舎ふ佐れば良師ふ遇
いぬ。何ぞやらん。拗ふ。投ぐ。膂力あれば。這頭では。角人相撲の最。

る。似而非腕扱でいへば。親ゆへ肖ざ孫破落戸まるべくやいひんとおもひて呵々とうち笑へば。
重時只管感ずて已まず再太郎をつくづくと見つめ。意ふかき優しき這子の本
性今戦国の時ふ方りて莊客まれ職匠まれ武藝をのく絶袴を求め名を
揚家と興さべ。但し那身い熟性とも冬の日ふ水ふ浸りて凍ざるようあらんや
あの一條い信ずべしと詰るを木丸八郎あざ訝りあへい理りあるあの義も亦極めて
故あり我家五世の祖べける麻呂太郎平信之より相傳へし人魚の膏油今有
有り偽へ云ふの膏油い昔一箇の樽ふ装られて塩濆ふ漂寓りしを信之不思議ふ
拾ひてひそかに秘蔵せり其樽い樟木をもて作る。藤蔓を筐ふあるる其大洋ふ漂ふ
こと年久しかりけれども。牡蛎海藻ゑどのヨヨく粘りて人魚膏油と寫しる四囲固
字い幽ふ讀れしとぞ然ども孰の国の産物ぞ流れ来ぬる故を知らず又何ふ用る
ことを知らず凝りて蝋の像くりけるを。開ぎ侭藏め置けるふ有一年一個の頭陀

あり。我家ふ宿せり日其頭陀件の膏油我家ふ在りと少知りて主人信之ふ誨
る事り倘人あり人魚の肉を啖ふ。其壽二千年を有べし。惜る膏油亦べ
齢を延ん奇効ず。遮莫是を燈火ふ做ばもとより風雨ふも滅ずして日月と光を
同じ又人身の目鼻耳脇肛門都て九孔ふ塗て水ふ入れば大寒の日といへども猶
温ず。凍ることなく波を潜りて海をも渉さえ又刀剣ふ塗ることい鐵を斫り角を
辟くべし。試ゆえ。とりてそ這信之の時ふ当りて刀鍛冶を活業ふ為れば件の人
魚の膏油をもて作る所の新刀ふ塗りて鐵斫と名づけて是を售るふ果して其
験ありければ漸々ふ知れて家優ふ富ませり時惜や膏油を用盡して殘り
二三合ふ及べば是を兒孫ふ貽さんとて則硝子の壜ふ藏めて其歳月を寫し
志を傳へて今ふ至るまで再太郎い試ふ大前年の冬くるに那膏油を身ふ塗
て今井河ふ入て泅ぎふ河水温るを湯の如く波濤を潛るも自由を前面の

岸へ渉ると。覩る者一奇とせざるなし。信れば他ゞ熱性にて泅を好むのみ。
冬ゞ冬の日水に戯れても。凍ぎ溺ることなし。人魚の膏油の奇特なる然るを。
益の技なのを費るゝが落情さに。小可歎きに。推禁て隠して使せざりけれども。今あ
る所を一合あまり。二合あまり足らざるべし。然れば冬の日水を泅ぎて凍ぎざる一奇談は。
是ある所以なり。と鼻春蛸めらして。説誇る折ふし。這門邊に来て立在る一個の
童男あり。ふと窺ふに行社衣を。腰に短き一刀を璫下らに跨ぎ。背に最小なる。
袱裏を駝ふくるゝ。左るに官笠を引提て立前にて。主客の問答に耳を敬けて
守て居りとは。知ざりし。重時は今木瓜八が話説を。再太郎の人と。人魚の
膏油の奇特を。守ゞ如く。欽びに堪ざれば。又木瓜八に向ひて。ふ。
年は正に我と同宗なり。先祖麻呂信俊主の數世の末葉なりと。今ゆゑに疑
ふべくは。我は妻もなく子もなければ。と。心地をまる。言倉卒に似られども。這子を

我養嗣に取りね。俱に里見殿に仕まつらば。父祖の與ゆも孝順を。鍛冶して其身を
終に踰らん。況今番の軍役に従ふて。戰功あらば名も揚げ。家も興を幸ひあらん。
和主のあらば甚麽ぞや。と。向へば木瓜八。沈吟して。開は他ゞ立身出世の階梯に。
我。徹ゝ。先主人の獨子でいへば。と。再太郎を見ては。答よ。再太郎。和郎も目
今守ゞ如く。和郎。這大父爺の養嗣なれば。武士を欲まる情願に稱ふ。左にも右
ゆも主張して。隨意答禀さぞや。とのられて。再太郎は。又紅るゝを解て貌を改めて。
重時にうち向ひて。不肖の我身を子にせんとある。御意を。思ひ。幸ひにも
ゆゝ。勿論他姓にゆゝ。親の家を絶に忍ぶ。必推辭べけれども。俱に是満呂
氏ゆ。同宗なれば一家にて。今より親と仰ぎまつらん。先三拜を受ゆ。
躰て身を退せて。三ゞ重時を拜れば。重時も亦遽て。礼を返せる。良縁奇遇
なの歓びに就て。又木瓜八を再太郎が。日屬に似る賢貌を。言約に我を折て呆

鍛鐵以
爲刀劍
冶心宜
爲武士
犬坂毛野

犬坂毛野
不ケ八

ることを平晌許さもくと口訥りそらぎを誓る親心子ゐ甘口る村酒ハ人の用あるを知らねども夜消の與ゐ買措ゑ二合半壜加ホ厨より出も乾魚を吹草火ゐ炙鋪の碟子執添て却重時を上坐ゐ請ひて俱ゐ献酬も親子の契り千世まで訛一壽詞も憑ゑ。臭い蘭ゐ及ぶ時重時ハ酒菜せんとて勧肚る長財嚢より金半を圓金十両を紙ゐ拓り便面ゐ載て是を木瓜八ゐ贈りてゐゑ我らまで其詳るゐを知ねども和主忠信の心りゑ。先主人の孤を守育る甲斐もるく我今切ゐ養ひ合て且塩濱の陣所へ帰て還れば明日ゐ出さで徒然るゑむ陣中ゑれば餘財ゑ。あるゐと薄義るりゑ。這歓びを表るのことゐと木瓜八ゐ開ハ亦要ゑ御仁義ゑ這大金を爭何いせんと辭ひて受もゑ。重時連ゐ推薦めて掖ゐ。合まれば木瓜八只得受戴ゑて躯て懐ゐ夾る程ゐ再太郎ハ恭く重時ゐ向ひて為ゐ其歓びを演ゐけゐ。當下復五郎重時ハ又木瓜八ゐ談るゑ知ることく敵の二柵ハ西の河原と妙見嶋ゐ在ゐ我再太郎と共侶ゐ早端を渉ゑ先駈て柵を破ゑ思ふ為ゐ人魚の膏油を欲ゑ。と乞へば木瓜八異議もるく開ハゐと易ゐことゐと応て奥ゐ赴ゑ。件の壜を出ゑ。又再太郎ゐ新ゑ綿入衣を被更さて故ゑる両刀を遞與ゐてゐ。是汝ゑ先祖ゑ。遺られる什物るれども數世用ゐければ藏措れ其甲斐ゐて今日ゑハ主共侶ゐ世ゑ出ん刀ゐ恥ゑ忠孝の道を。喪ひゑと諭せば再太郎受戴ゑてそゑ。親ゐ齊ゑ類ひの恩を返さで別ることゑ。義父大人の庇ゐ。武士の數ゐ入ゑ。必安房へ迎て反哺の本意を果さべ。とゐゐ木瓜八領くゑ。胸疾ければ答ハせで涙と共ゐ人魚の膏油の壜を卒。とゐゐ遞與せば重時怡悦ゐ堪ず其心操を謝ゑ告別て身を起さまゐ去ゐる程ゐ門傍ゐ立ゑる那童男ハ遽く聲を被て屋ゑ。ゑ。と嗄林ゐ。ゑ投捨て内ゐ入て重時ゐ向ひてゐ。仙ゑ。時ハ幾番狩御目ゐ

被り一日のありけを今い迭ふ面と忘れ一ふ料らぞ那里ふ来ゆ析這里ゆる主人と問
答ふ名告のり一と少く知り奴小父い是我先父の義兄弟満呂復五郎主人ゆ
恁ゆ已い宇安西出来介景次ゆ獨子ゆる安西成之介ふて仍ら隙知せゆひけん我身い
母の俗縁ある上總ゆる山中村弓折塚の凹遊ゆて遠山寺と喚做一たる山院の住
持ふ養れて年来喝食ゆ仍り一ふ昱裏ふ我父出来介い忠義我の為ふ素藤と刺
ちく欲ゆ一事成らで其里ふ命と殞一ゆと風の便りふ少え一ゆ伝ち歎ゆてのゆ仍り一ふ
ゆる夜夢ふ奇ゆ生ゆ一ゆ親の聲狭とゆ仍りくてゆ成之介ゆ生ゆ知ゆや今番里見
殿ふ大敵ゆ一ゆ鎌倉の両管領ゆ合縦連衡の大軍ゆて水陸ゆ一ゆ攻伐ん与ん我義兄
弟満呂復五郎い大川大田両将のゆふ隷られて必行徳の陣ふ在ん汝那里ふ赴ゆて
復五郎と憑ゆて役ふ従へ倘幸ふ一ふて軍功ゆ一ゆ里見殿ふ仕まゆて我志と紹ぐふ
足ん勉ゆ一ゆと狭と思へ悄然ゆて驚ゆ覚ゆ一ゆ覚ての後も胸裏ゆて其聲い

尚蠅々と耳邊ふ在ゆふ仮ゆれ歎ゆの中ふ勇れて正夢ゆ一ゆ思ひ一ゆ躯て師の坊ふ
告知一て身の暇と請ひゆふ師の坊允一ゆ一ゆ得意表と寫遂一て悄地ふ旅の
准備と為ゆ一ゆ夜ふ紛れ亡命一て且れい走り暮れい宿ゆる通路の艱苦と厭ゆ今日梢塩
濱の陣所ふ来て則御身と尋ね一ふ漫行をせ一ゆれ一やゆん那里ふまゆ一ゆ。と少え一ゆ一ゆ
なゆ一ゆて料ゆ一ゆも這里ふ在せ一ゆと知ゆる一ゆ一ゆ。満呂同宗の義ふ仗て子と養ゆ一ゆ欲一玉
ふ其要談の最中ゆれい仂ゆ一ゆ名告も少せで言の果ゆと為ゆ仍ゆ一ゆ義ふ仗ゆる一ゆ一ゆ御
身い小父一ゆ一ゆで猶子と為一て這番の役ふ倶一ゆ一ゆで光と増ん玉櫛笥かゆ一ゆ夜我
二親も草の原ゆ欝び結ゆん宿世鈍ゆる剣大刀身い脚曳の山院ふ生育一ゆ一ゆ物部の
八十宇治河ふ疎けれと夏の日消一ゆ年毎ふ山河の水ふ戯れて泅だと上旨と為ゆ一ゆ一ゆ
暴河と渉ゆ一ゆも後ゆ一ゆ思ひ結ゆ一ゆ是ゆ一ゆ果敢ゆ一ゆ投ゆ一ゆ一箇の本事ふ立て願ひと
遂ゆ一ゆ一ゆと口説く言葉の露と為ゆ一ゆ清ゆ一ゆ心い見れて直と額衝く板席の塵埃と洗ひ

流るまでに涙坐に找こける思ひ入りの又這奇遇に逢て大ひに驚き重時はつくづと守て感嘆大々ありて平伏する成氏介の額を推抗け得と見て現稗顔に覚ある生来仇ぐ子であるよ扨も大ひなる哉汝が親の末期の筆に寫貽されし我れば我一日も汝のるを思ざるにあらねども曩に素藤と對治の折我身深痍に命危く療養某餌の月を閲して久しく屏居てありけるに先月は中院に至りて刀瘡やう癒く愈しなば又軍陣に従ふて往る日あの地に来られば汝に親の送言を伝る便宜なりに其志親に劣らぬ忠義を紹んとて十五に足る總角の身さへ命を捨てなりで今番の軍役に従んと玉鉾の路震に上總る山中村の山院より我を尋て来ふけるに了得に親の子えけり出来介の義死の折館の御尋あるに我既に汝の事を言上に及びに御執立あるべしとて其御内意の旨えかども是より後も云云と事ヨるれば件の一義に再度の御沙汰あるめる汝の親と共侶に義侠の與に命を捨ける南弥六の養嗣増松の例もあれば憑しく當陣の両大将犬川大田に懇ろに必や用ひられん年は幾に成りけるぞと問へば成氏介然しひ今茲は十三に成る宜く憑しきなるとなく袂を折返して悄と感涙を推拭へば重時さてと慰めて却て木瓜八と再太郎に成氏介を引會まれば甲乙倶に重畳奇遇を感じ且歎びて迭に憑しく思ひけり當下重時又ひ曰我今日の漫行は獨陣中に徒然を慰る為のみぞ悄地に今井河の浅端を捞りて欲まるるのみれば然るを料ぞあに束て同姓の子を養ふて且馮河の奇某を為ぬ汝ヨく知るに幸ひるに這義甥の束つに逢ぬ歎び何ぞ是に優べ早く陣所に推乃かりて我両将に免許を請んぞと云そぐせば誰か歎び勇ざらん再太郎に膏油堰云の袱裏を引ふ家伝の両刀を腰に帯て成氏介と共侶に木瓜八に別を告て凜しくも重時の後に跟て出でゆと留難なる木瓜八を門傍に立て目送りけり恁而満呂復五郎重時に件の両個の少年と倶して

塩濱の陣ふかく来て。隨即大川荘介と犬田小文吾ふ有り。事の顛末を詳ふ告愬て。請ふて成之介と再太郎を見せ。荘介小文吾感歎して。詞亦尽く賞ふ。安西出来介の孤のゆえ。豫館の御仁慈ふ。其義ふ及れねども。ある日荒磯南弥六の後と。雪ヶ那磯崎増松。実父阿弥七ふ倶せられて。洲崎の御陣へ参りしと。荒川主奉そ烽火臺の助役ふ。ふれ。有徒れば。這安西成之介の孝義武勇の心操を。只今館ふ。上意必是御感ありて。軍役ふ充ゆえ。那増松のどくるべ。然ども洲崎の御陣まで。路近ふ。徒ならの小事。とて火急の注進。憚りあり。異日の便宜ふ据んのと。又その少年再太郎。満呂同姓の義ふ仗て。復五和殿の養嗣ふせまく欲。とあるを願ひの趣。亦奇遇とのべ。人として後ふ不孝の第一。ふ聖経ふ本文。あれば。その義も館聞召さば。情願免許疑ひ。其折まで這少年。復五郎殿のふ屬ん。小腕ふ相応し。挿ふを教えて軍功あらば。御感入ふ。増まべ。誠ふ珍重々々と。祝して成之介ふ。両刀と。身甲を與へ。又再太郎ふも。札ふ。甲冑を取せけり。登時荘介。又の。這安西成之介。先父出来介。景次の志を紹ぐ者。これ。今より字の之の字を省て。就介。景重と名告るべ。又再太郎も。実名ふ。敵陣ふ臨む時。名乗ふ不便。ん。則那家の通稱。信も亦麻呂。信重と告るべ。とよろ。景ふ安西景。ふ。信俊。世々名ふ。羨紹ぐ。一字。甲乙是ふ加ふ。重字。とせ。ふ。俱ふ。重時ふ。遵ふ。世ふ。ぶ。べ。ば。義を表。亦。欲びて言。羨。ある。重時。急ふ。推。禁。荘介ふ向て。ふ。他。ぐ。為ふ。過分。紀。御意。亦。くべ。ども。在下。何。の。徳。ありて。其義ふ。預。ふ。願。ふ。西君。名。一字。他。ふ。授。ば。子孫ふ。伝。栄。面目。上。べ。御許容。れ。と。請ふ。荘介。ば。ば。不。我。名。霊。八。ふ。据。者。れ。分。人ふ。授。和。殿。他。ば。親。呼。謙。遜。辭。譲。人ふ。と。謂。

要ぶるのみと諭せば小文五郎も亦ふかく物本末あり事終始あり再太郎が本末
満呂が在り就以ゝ始め重時が据らざるとを思ひ見るべし然るを他人の名字を乞ひ
本と末を欲りし始を思ひず終に就く事の宜しからぬかを名を取るを
実を捨て取るとなれば重時脱る路なく就て再太郎と共侶が其欲しび演ふ
その時大川大田両将が従ふく當席に在る者は登桐山八良千葉皆是腹
心なれば重時は又勝を找めく莊介と小文五郎に告るを在下今日料ぶ
も這再太郎が家に伝る人魚の膏油を人の身の九孔に
塗て水に入れば今大寒の時とも敢凍え溺ることなく海を自在に渉るべし
経験は再太郎が既に試みし実に奇莫しとへる惜むべし其膏油今あり所
ヨスクラボ一合あるるをもて士卒に配分あるべけれども在下親子と就以
ちに三個に用ふる足るべし隊は館の御上目に敵の推寄るを待つ找

むとを許されねども憚らずして愚意をもて量るに今目前に敵の二柵を破て
河を渉り寄隊の胆を拉ぐ全勝の勢に乗べし隊這義を思ふをもて衝
身単立出て土民に問ふ浅瀬を索ひ渉べき処を求ひ就以
も夏毎に溪川の水に戯れて泳ぐことを知るとへば在下他を相伴て今
宵悄地に河を渉て敵の柵に火を放さん登時両君は快船を一隊は河上
より江前面へ渡て敵の活路を絶の空に一隊は徑に今井河より押し挾て
攻伐玉へ呼て敵の頭人を虜にせんを易し隊の説に儘あり
むやと言男まで薦れば小文五郎は黙頭くのみ許ふかぎれども良千
葉は皆是を喜て良策なりと思ひけるを中に莊介は件の言の趣を聴果て
却て我も亦隊より其義を思ひ館の御上目あるをもて今日
寄隊を俟て徒に日を過せば只戰飯を費すのみ謀る者に似る

然ば先那柵を破りて河を渡りて敵を俟べし。寄隊と戦ぎーく。他が勢ひを折くふ足人。あれども那二柵実世ふ尚稀なる大銃の備あり且究竟の弓をヨヤーと呼ぶ。然るに漫ふ攻伐ば自家ふ戰殺ヨヤ多ふべーと思ひ久しく黙止ふ満呂生然る奇策あらば寔ふ便宜とおもひつべー。遮莫漫ふ揣るべらば。今宵我唐の張巡が段ふ倣ふてヨヤく菓人を船ふ建て烏夜ふ乘して突然と敵の二柵ふ推寄て。他が糧を食ふ。銃丸も及ぶべー。然ば彼那柵の頭人ども。詭計られ逃と後悔せば我士卒又後の夜ふ艦を那里へ漕寄て。亦復柵を脅をも敵ハ必先度ふ懲りて。糧を射出さぬ銃砲をも慎めて。倒ふ由断せん是必然の勢ひ。其折ふて復五郎和殿ハ這少年ども従へく。悄やうふ河を渉りて敵の柵ふ火を放さば。攻一攻ふく敵を拂ん先菓人の計畢とぞ。敵を懲して弓箭火銃を禁めぎい失あらじと諭せば重時信服

あぞ。妙計とぞ感じける。おの計ひを相歓ぶ登桐山八良干ハ小文五ふ向ひて。在下近属蜀軍書の講をやひ〜ふ元人東都の四維貫中が三国志演義ふ載くりと云那魏ハ公曹操が呉ハ孫権と攻伐まく欲りーける赤壁の闘戰以前ふ呉の都督周瑜が胸狹くて剣を玄徳の軍師ふ向ける。諸葛孔明の才を忌む故ふ猛可ふ数萬の箭を求めて其約束の日と違へ速ふ作り出さぬ罪をもて斬らんとのひ〜を孔明輒く諾ひて敢困ぶ一面色せぬ菓偶人を多く作りて丹を数十箇の艦ふ建て野干玉の夜の深〜時候ふ敵の守る城あるの所の江邊ふ漕よせく鼓を鳴ら〜興の聲を揚げ。俄然として攻寄るべし。勢ひを示せ〜ば城の士卒も驚ぎ騒ぐ。箭を射出さぬ風ふ横吹く驟雨よりも敏ふりければ其菓人ふ立ツ処幾萬幾千條るを知らぬ既ふ〜孔明ハ思ひの隨ふ敵の箭を得て。疾く艦を漕返さぬ其箭数萬あり

る。則周瑜ふ與へ〻ば周瑜い其智ふ我を折ていふ〻娼く思ひたとふ。あゝ是演義の趣〻分るふ今大川主人の義を説く〻唐の張巡ゞ段ふ倣ふと宣ひ〻ろ〻ろ〻かり願ふい誨えゆひ〻と問ふを小文吾うち笑て否我い只武を宗とする。文字い大塚犬川ふ及ぶべくもあらざれば。まゞ其義を考ゆゞ犬川序次ふうち歩して人の疑ひを解ずゝとゝへば壯ん微笑て然〻雜買中ゞ三國志演義の一書い虚と実と相半して作り設けゝるも少〻ゞ壁ゞば目今登桐のいつゝ孔明ゞ敵を計りて。數萬の箭を合るふい素より陣壽ゞ三國志ふも又宋の司馬光の通鑑ふも因く唐書を按ずるふ。ゝ唐の張巡の故事を皿維毋貫ゞ撮合ゝ〻る〻那張巡い唐の忠臣〻玄宗帝の時安祿山ゞ乱ふ唐の諸臣位高〻賊ふ降りゝふ惟張巡い孤城を守りて死ふ至るまで敢屈せず竟ふ矢種殫〻ゝ張巡則藁を縛ねて人のごく作成ず者一千餘是ふ黑衣を被せて。

以夜縋け下ずふ潮兵（禄山くのあそ賊兵ゝ）。爭ふてこれを射る。久〻して乃其藁人を引揚〻へ還せば。潮兵の箭十萬を得ゝ。その後復人を縋け下ずふ賊徒笑く備を設けず。乃死士五百を以進く賊の陣営を斫る。潮軍大く乱れゝ遂ふ黒土幕を焼て奔るを追ふと十餘里（以下略）と唐書第百九十二忠義列傳張巡の傳ふ見えゝ。近世天朝ゝ〻の謀ふ倣ひゝ惟千早の楠是の義ふ忠義も張巡と拮抗ゝて楠公い猶勝れゝ。その他那演義ふ見える漢中の鬪戰ふ孔明ゞ城の門を開て反く曹操を退けゝとふるも其実い孔明ふあらず。則是趙雲〻趙雲の外ふ門を開て敵を退けゝ者唐の時ふもあり。太子謹行即是ゝ事い唐書第百十。李謹行傳ふ詳〻又孔明ゞ南蛮攻ふ獅子〻作らく孟獲の使ふ猛獸〻權ゝ追奔せゝとふるも其説の劣所別ふ父母ある寓言〻恁るゆヨ〻れども。あく〻ふ要るけれ〻具ふせず異日別ふ識すべゝ。蓋士君子の稗史物の

毛鶴山ノエ国志演義の評注及金聖歎ノ外書ノコレラ是ものの虚実を辨ぜされば猶飽ぬ心もち因て聊是を及ぶ婦幼の為めに厭るべ

本と悦ぶ是学問の餘樂のみ先よく眼を史傳に晒して其見る所博くば
れば誰か虚実を分別して作者の隱微を發明せんやそをもて今洒家が敵の
節を合する故事を談ずるに三國演義を取ぞして唐書の張巡傳を引る然
まで疑ふ所と解れて感ずる良千重時就て再太郎に至るまで耳新く思ひ
ける當下登桐良干が莊介ふたり向ひて言の欵びを演ていはく今の翻ぬ所
ども和君等八人が天授の才ぞ生れ出ぐるに知るべし今戰國の時に方りて武
備いかゝ文学まで自得かくの如ふに至んや感心の外ひまぞとらふを莊介ぞ
不日とも我が市の七歳ぞ逆旅に母を喪ひ大塚墓六の小廝にせらまく
身が最賤しかりけるに幸ひく犬塚と悄地に友垣を結びより那人の邦助よ
和漢の史傳を見ることを以て文が大村大阪あり又犬江あり犬塚あり
我よく及ぶ所にあらぬ弁を舉ぐ餘談に及びける間話休題

余程に犬川莊介犬田小文五吾が日猛可に士卒に下知く蒿人一千有
餘を作らしむ其偶人が外を堅くして内を空虚にす則外の敵の笠詞を
受くべ内の敵の鐵砲鉛丸を受納させん為へけり既にして其曛昏に都く
作り畢りぬ是に紺衣を被せて船四五十艘に分ち載せ士卒が其蔭に
在りて這艦隊の頭人が登桐山八郎良干満呂復五郎重時並に満呂再太郎
信重安西就次景重等相從ふ艦毎に雜兵舵工と共に二千名に過ざりけり
其日が十二月初の三日にければ黑白もろ〳〵真夜半時候妙見嶋と西河原な
る敵の柵近く漕よせく諸艘一度に裏然と攻鼓を打鳴らし興の聲を
發げ蒿人の陰よりして火銃を發ち箭を射出して突然として攻入らまく
欲ふ其勢ひを見るを程に二柵を守る敵の頭人猨嶋郡司將衡小越小
權太表練彦別夜叉吾數世等が士卒と俱に驚騒ぐ敵のヨヌ寡ぞ

見定めるされば只破られあと構く攻鼓の音興の聲と奏べゆゝ各相爭ふて銃
砲を發ち發前を射ると雨霰より殺ろけれども敵ハ撓ぎ去らぬ〻て相挑む
と三晌許天ハ明ぬと奏る時候良千と重時ハ徐ふ諸艦を漕返さゞて那
里の首尾を莊次と小文吾ふ報知しゝ却其詰朝蒿人ふ立て出船を命ず
るふ約莫二三萬條ゑれあり又蒿人を解て内ふ止り一銃丸を命ず出ふ其
鉛丸二三斗ありければ労せずして得ありとく笑ざる者なりけり恁而十二月晋ふ
なりぬ去の日廿壯次小文吾ハ良千重時信重景重等の諸士を集合て示さゝう
鄉高ふ洲崎の御陣より遣されし快船来着して犬阪大山の奉書らふ在り
敵ハ去の月八日の曉天ふ水陸俱ふ推寄せゞ勝負を決さべしと云既ふ其ゝ
あり然るべき去の地へ向ふ敵の軍兵も今日秋明日ハ必寄べし因く其使者詰茂
佳橘等の幸便ふ縁りて復五の情願並ふ再犬就次の事の趣を犬阪大山ふ

消息奏て件の御使船と返しゝ必ず上らるべし却今日の軍議ら別事
ふ敵の二柵ゑる頭人士卒ハ昨宵鈍くも計られて早く箭丸を費しさ
れば今宵又船を寄ずとも懲りく備を做さべくゝ其懈まる時ふ臨て諸
艦齊一漕ふ短兵急ふ伐破られ但し那二柵の汀渚より十間許水中
ふ鐵の鏁索を張亘て艨艟を遮り馬脚を拽駐んと構ふと雖
昨夜ハ我艦其里まで届らぬ去ゝ早く見りられ今宵ハ我艦ゑれども必
件の鏁索を踰ぎ柵ふ近つゝと云し去の弐什麼と商量を莊次と共侶ふ
小文吾も亦是を談ず軍議ふ脱落りけり登時満呂復五郎重時ハ
突然と找を出て則二犬士ふ朝ひていふ其水中ゑる鏁索の事ハ昨日生嘗
如く人魚の膏油の奇葉あり是をのて刃ふ塗れば數百介の鐵ゑるとも豆
腐を斫るより易しとハ是をのて今宵の湍踰を在下ふ許しゝ再太就

介を相伴ふて悄地ふ今井河を泅ぎ前面へ渉りて水中の鎌索を断へぐ。且柵の水門より潜び入て火を放ち柵を焼てのく暗歸を仕んへ。這義をあの美を。と思ひ入りて請薦れば莊介有理と領ぜて其美宣ふ宜しからむ。縦柵を攻破るとも善悪も別ぬ烏夜ゑれば不知案内の自家の與ふ。進退不便ゑ。ふの和殿名先柵を焼ゑ開て燭ゆて漏さ者なく必敵を亡ぼへ。柵の頭人衆兵ゑ。昨夜ふ懲ゑく備を做さで。と思ふ凡自推量のゑ猶小心ふ考くとゑ。和殿名今宵先ふ栽て悄地ふ河を渉ゑも。只その功を貪りそ漫ふ惴らば失あるむ勉慎ゑれと敬言れば重時い忻然と歎ひふ堪ざれば言義ゑて退ぞけり。慫而犬川大田両将ハ倶ふ今宵の隊配を做ゑふ莊介ハ千五百の兵を率て西河原の柵を伐破るべ。又小文吾も千五百の兵を率て妙見嶋の柵を破んとて四日の日暮てより倶ふ

数十箇の艦を汰へて悄々地ふ艦ゑの餘の衆兵ゑ。留めく塩濱の本陣を守らゑふ登桐山八郎良干を頭人とゑ那二柵を破りく後ふ徐ふ河を渉させん為へ有慫一程ふ満呂重時い再太就介と共侶ふ甲夜より先駈の准備をるゑふ先那人魚の膏油をりて各帯ゑる両刀を抜出て塗ると幾番ゑを知ゑぞへの餘ハ三個の一身九孔都て漏さぞ塗ゑふ肌膚光澤やゑふ滕理細ゑふ做りて寒気を覚ぞ惜むべ。ヨりゑ收膏油ゑふ盡ぞふけり。慫而這義父子義侄ゑハ倶ふ牛の項草をりく綴りゑる身甲ゑ。鮫皮の釬脛衣膚ゑ鰐形を被ゑるゑ腰ふ跨ゑる両刀を波ふ含られぐと吊緒を揖て帯ふ係ぞ重草の燧嚢を各脇の邊ふ楚と夾て。水ふ入りそも濡さでとゑ。既ゑて夜ゑ中の左側ふ下今井より二三十町許ゑる河上ふ造りく。うち連りく暴河ふ入ゑふ現奇茱の效驗違ぐ今

宵い寒風沙を飛し。波濤起噪ぐ且流早ければ。音ふ吟く水の勢ひぶ氷海夜囲ふ入る心地ぢく。堪かねぢんと思ひ。水ふ入りてハ倒ふ其温ぶふと湯の如く。且暴波を被ぐても。呼吸自在ふして。地上ふ異ぶらぐ。論めどもおのづから。身ハ浮く泅ぐ易ぶ。再太郎ハ夏の日毎ふ。這暴河を渉ぢ。推流さるべくもあらぢ。重時も亦上總る海濱ぢく。水ふ熟ぢる甲斐ありぢく。亦俱ふ泅ぐふ。獨就ハ尚未熟ぢく。這暴河ふ堪ざりけん。動もすれば流さるゝを。重時再太相扶けて。妙見嶋と西河原の柵の間る河中ふ洲ある処ふ来ふければ。這頭ハ都て浅瀬ぢて。僅ふ足の立ぶて。共侶ふ一憩時憩ひて。猶も便宜と思ふまく欲ぢる。重時ハ隙ぶ就ハ再太郎ふ悄語ぐて事のぶらを泅さまるぢ。妙見嶋ハ小敵ぐ西河原の柵を焼ぐ。那里ハおのづから乱れ走んぬ。再太郎ハ那邊ふ張亘ーる。水中の大鰷索を斫棄て。自家の艦の去向を開ぐ。我ハ汝ぢふ先ぶて。獨西の柵ふ近づぐて。潜び入る。ぐ便りあらば。招ぐ。ぢく俱ふせん。必惴ぢぐ。と諭ぢて。就ハ再太郎ハぢる。れば叩ふ找まぢ。權且ぢふ憩ふめぢる。水ぶる上ふ出ぢ者ハ只ハ是三個の乳ぶる上のみ。仰ぐ天を瞻れば。霜相満星光めぢく。友喚ぶ知鳥の聲ぢるのみ。誰思ひ難く妹許ぶ。河風寒ぢく冬の夜の間ハ目ふ見るめもぢ。倦而在るぐふあらざれば。再太郎ハ又悄ぢふ。妙見嶋のぢふ泅ぐ果ーて。柵を去ること遠ぢ。水中ふ張亘ーる。大鰷索。両三條ふ。れハ躯て腰ぢ。匕首を脱出ーて是を斫るふ。奇茱の效神効ぢるかな。宛草蔓を丈ぢる像ぢく。力を入れぎーて断れぬ。有徒ぶ程ふ重時ハ就ハ洲ふ留めて。身單又急流を渡ぐて。西の柵ふ近づく。ふ。ふ。も水中ふ張亘ーる。鰷索。腰刀ぶ。是を断ふ。皆其刃ふ隨て斫られて水底ふ沈ぢく。重時深く心ふ感ーて。人魚の膏油の大奇大

效用る所一も違ざ惜哉是ヨリ心自家の士卒ヲ配分せきれば我のミわて
後竟ふ世の人知る由ふ為べ。と思ひて猶近つ寄て水門より柵内へ潜び入らま
く欲る程七八間ふ成り一時思ひ付き柵内より樓と發せる大砲ふ憐むべ
重時ハ半身亦韮粉ふ打碎れけん水火激き殺伐の音共侶ふ波の底ふ淪
果て水屑ふ做られ二魂早く天ふ歸ら。六魄既ふ地ふ入る。ざ常迅速今ハ
ら多。就ハ吐嗟。とぞ宜ふ。ち驚ふて委一見るふ果一て小父ハ打碎れけ
波の寄るのミ人ハあらざ怎麼何れハ命運薄ふ。怎まで量り一今宵の先
駈。五十歩百歩の間ふ至りて杖と一憑まて来一甲斐も多ふ世ふ立ふ敗ふ
人の終りの果敢ふさよ悲一ふ多。といへ共ふ音ふて立ね敗人の涙珠成ま歎ふ
あてせん術知ざ在り一程満呂再太郎信重ハ妙見嶋の柵近ふ水中ふ大鎖索を
皆斫捨るふ水音させざ波も起せ引返ま方寸委ふ孝順義勇。

親の俟らと思ふ心の急れて就ハ心穏ひ居る舊の洲ふ復泅ふ渡つ則事の
凶変と就ハ心告るを聞て胸淺れ勢ひ折ぜ俱ふ哀ふ堪ぎれば返ふ成ると云云
と。悔て且ち歎くのと思へば。計の多る所を知ざ進退ふ谷りて愀然ふと
半晌許儘せ世ふそ怎ふ悪ふ知るや丑三の鐘聲幽ふ響けり有怎
程ふ大川大田二隊の戰艦數十艘昨夜のごく藁人を建る艦五六艘と
先ゆて分れて件の三柵へ悄ふ寄ふ東ふ再太郎ハ就ハと俱ふ逆ふ透ま
見く他那艨艟へ自家の艦の既ふ漕ふ来ふ我大人空ふ成ふ我
們ハふ在り合ふ放火の約束を違へば戰ひ竟ふ合期せず自家敗軍ふ及
ん歟是も亦知るべ然ハ是大事を行る我們ハ罪免れ難ふ幸ひ
競ふ成ふ其折何を面目ゆ我両將ふ見ん。左ても右ても死ざ身ふ先
柵内ふ潜び入て折もよハ火を放て敵の用心堅固ふ其事倘做ふハ一人ふ

古の出像の本文八上下共第百六十二回ふ在り後板出るふ及て詳るべし

とも敵を殺して共侶ふ戰殺せん今はかう躊躇ふとうんと性起る武男ふ奬さる就
て有理と感激して开ハ勿論のこと意ふ那水門の内ふ守衛の敵兵ふ見れば
そ小父ハ矢場ふ殺れたを然るを猶懲りぎまふ又那里ふ入らまく欲せば前車ハ警言と
思ふ似たりこの毛甚麼と談ずれば再太郎も亦頷ひて然之愚按も其頭ふ過ぎ
因て意ふ他那西ふ波稍盡処ふ右のくに都て柵の肋ふ沿ひ守兵必稀ふべし
矧亦那柵内ふ水上ふ垂る老柳一株あれば开を樹ひて潜び入らむ期ふ後れず
背隊へも敵の用心那里ふも届ひて由断ぜざるを誘ふくいそぎ就て這議ふ
従ふて敢又尋思ふ及ぶ心術一對武男の少年傳ハヨヌくも疲ふ浮沙沈と
ゆ立泅ひて柵の背隊ふ近ふ寄ひけり畢竟這両少年ぶ怨ふ堪ねば死を極め居
孝義の先駈果せるや不吾や开ハ又下回ふ解分るを聽ねか。

南總里見八犬傳第九輯卷之五十五終

南總里見八犬傳第九輯下帙下乙號中畫工筆耕彫匠名號目次

出像畫工　玉蘭齋貞秀

浄書筆工

谷金川　卷三十五

澤金郎　卷三十四

常盤園　卷三十四下

彫工

澤金郎　卷三十五

常盤園　卷三十五下

澤金郎

南總里見八犬傳第九輯下帙下乙號下編　五冊大圈圓まで當年内續出

本伝第九輯下帙ハ亦さ元て甲乙二号と元其乙號ハ長ろあ元て亦復さ元て乙の上乙の中乙の下と元
乙号則十五冊ふて結局ふ至れり乙の中編既ふ刊行ー訖ぬ乙の下編もち續元て全備ま元りのあり

玉石新書

中本第一集二冊　玉蘭齋貞秀画　来子の年出販

翁の中本の作ハ文化以来ろろ一ム本房ぢ〻ム求め僅ハ一作ものを

開卷驚奇俠客傳第五輯

この一書ハ年々八犬傳刊刻の故をもりく嗣出延引せり今茲八犬傳局を結ぶをもて又本傳を刊行ま發販遠ろ〻ぐ　五冊近刻

近世説美少年録第四集五巻

あの一書も中絶有の俠客傳ふ同じ八犬傳結局皆板の後必ずぐ出さるべし近刻

著作堂一夕話

翁の隨筆なる物ふ是と一席話と録し又亨ふ雜の記と雜交記とあるしてゆまはのもと傍訓を附けるハ甚しく誤る。初集大本三巻近刻

右曲亭翁の新編本房近刻の者を畧記を　江戸書林　文溪堂正鋪藏板

曲亭翁精編八犬傳の一書ふ全本九十有一冊百七十回ふして結局大團圓ふ至ると云ふの内中第百六十一回以下所云第九輯下帙の下乙號の下編五冊も陸續刊行して〻全壁とるさまくを翁二十六七年の腹稿大筆和漢ふの外ふ沒ふ所最勉さりとのべし刻板全部本房藏弆佳紙良刷製本美〻黄ふ賜顧の君子全備既ふ遠〻ふ後板の出るを俟のべか　書林文溪堂敬白

○家傳神女湯　一包代百銅　○熊胆黒丸子　一包代五十

婦人の産ふ妙藥

○精製竒應丸　大包代金拾匁　中包代一匁五分　小包代五十匁

○婦人の産ふ妙藥　一包代六十四文

○御茶わ〻ん仙女香　一包四十八文　黒油美玄香　一貫四十文　江戸京橋南鍋町三丁目中程坂本氏製藥本家　江戸四谷塩町二丁目谷の上　瀧澤氏

○金匱救命丸　一包代百文　江戸日本橋通二丁目中程　弘所　元飯田町中坂下南側中程　弘所　江戸

○金匱救命丸　一包代百文　江戸日本橋通二丁目中程　弘所　元飯田町中坂下南側中程　弘所　江戸

書肆　丁子屋平兵衛

後板五冊推つぐ出販全部相揃ひ年々初輯より皆揃出し候

天保十一庚子年春正月吉日發行

京都三條通東洞院東へ入　大文字屋得五郎

大阪心齋橋筋博勞町　河内屋茂兵衛

京都寺町通佛幸寺角　河内屋藤四郎

江戸大傳馬町二町目　丁子屋平兵衛板

發販
書行